

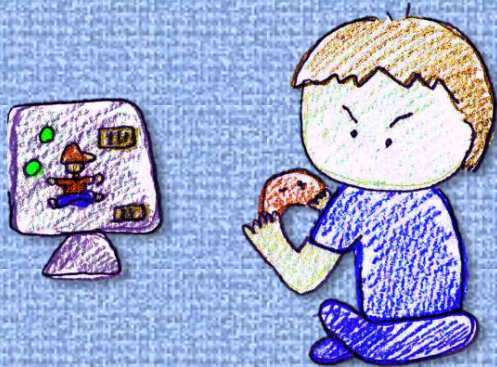
事例から考える

不登校の背景にある
ゲーム・ネット依存症を考える
家族がつながることの大切さ



事例から考える

中学生から、高校生に上がると、急に勉強についていけなくなり、家に帰ってきては、オンラインのゲームにはまるようになる。生活のリズムが崩れ、部屋から出てこず、ゲームを取り上げたりWi-Fiを切ったりすると怒り出してどう対処していいかわからなくなってしまう。食事中も、ずっとスマホ見ているばかりで、何か話しかけたとしても、すぐイライラした様子で、食事と一緒にしなくなってしまう。そのような姿を見て、親としては不安がつのり、また声をかけても拒絶・反抗的な態度でどうしていいかわからない。学校も休みがちになり、とうとう不登校になってしまった。部屋からはチャットなのか、ゲームの中なのかかわからないけれど、「死ね」「くそっ」「ふざけんな！」等暴言が目立つ。悪化しているように見えるこの状況を誰に相談していいかわからず、困惑していた。



家族構成：父・母・本人（高校1年生）・弟（小学5年生）4人家族

父会社員・母パートで短時間勤務、経済的な困窮はない。母は困って学校に相談し、教員の事は信頼している。父は子どもの教育に厳しく成績が下がると子供たちを叱る。父と母はあまりコミュニケーションがとれておらず、子どもの事であまり話し合えない。本人は中学生までは成績は優秀。中学はサッカー部で3年間こなしていた。中学時代は友人も多く、対人関係のトラブルはない。



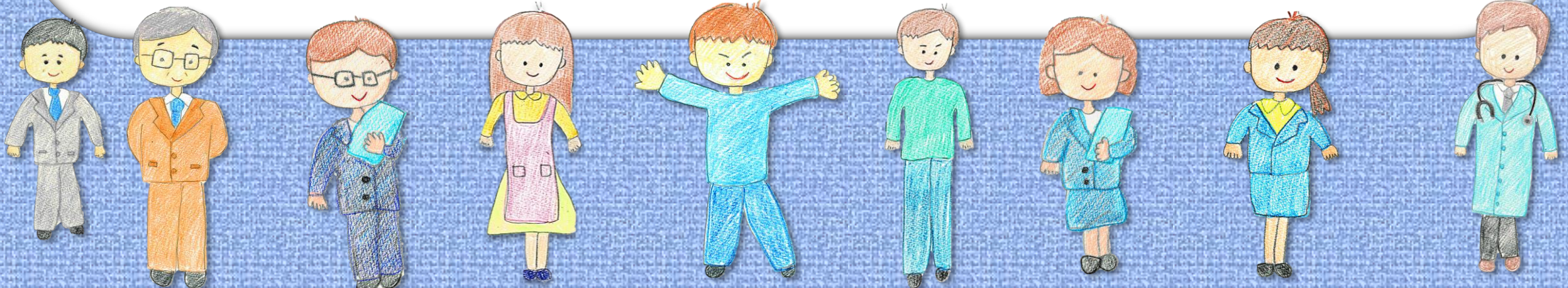
欠席の連絡が続くようになり、担任に相談したところ、スクールカウンセラー（以下、SC）との相談を提案された。予約をとってもらい、学校の相談室にて話を聞いてもらった。はじめは、自分の育て方を責められるかと不安であったが、SCより「ゲームをどうするか」というより「本人の生きづらさの理解」「その中にある成長」に焦点をあててくれたので、責められている感じはせずに相談に臨めた。主に、週に1度50分の面接がはじまり、ときおり教員も一緒に相談室に入ってもらって「本人の理解」の情報共有をした。どうしても「自分の中にある」罪悪感があるが、SCからは、誰・何が「問題」ではなく、母からみた率直な本人像を語ることを求められ、本人の課題が見えてきた。しかし、本人の理解が深まるが、それを夫に相談できなかったこと、自分でも苦勞・困難を感じていた。



依然と部屋から出てこない本人にどうかかわるかという問題に対して、理解のネットワークを広げるためにSCより、スクールソーシャルワーカーの提案（SSW）。なかなか本人は相談室にはきてくれなかったけれど、訪問であればお話することも可能と思い、依頼することにした。家庭訪問するまえに、まず学校の相談室で、SCとSSW、そして担任と一緒に本人の理解を共有して、理解を共有した上で、訪問をする約束をした。SSWが訪問して、はじめは本人が抵抗したため、玄関先でお話をするのみであった。しばらく、玄関先での話し合いが続いたが、定期的な相談室でのSCと担任-SSWとお話を繰り返すことで、本人の理解が深まる。



以前は、ゲームのこと、進学のことを強く言いすぎていたが、「学校で関係がつかれず居場所を失っている」、「これまで勉強が生活の中心であったが、そこで行き詰ったときに自分は何をしたらよいかわからなくなること」「学習環境がいつぱんして本人も何をしたらいいかわからない」等を理解すると、自然と母の言動もやわらくなってきた。その中で、本人との何気ない会話も増えて、「家族と一緒にならSSWとあってもいいということ」で、家族グループ面接を実施した。本人を説得するのではなく、母としての思い、父の考え、そして本人の思うことを順番に話す事ができて、それぞれの気持ちがあった。その後も、SSWとの家族相談-SCとの学校相談、担任との学習面の相談など繰り返しながら、関係者での支援会議を実施し「本人の理解」を深めて対応の在り方を模索する。背景には発達の違いが見えてきて、「勉強を効率的にする方法を知る」ために、SSWに相談して、精神保健福祉センターに連絡して、医療機関を紹介してもらった。医療機関では心理検査を実施し、その検査結果をSCがわかりやすく家族に伝え、そこから相談室にてSCより本人にも伝えてくれた。教員-SC-SSW-両親-本人-医師-病院心理士との回復ネットワークができた。



保護者が担任とSC、そして本人が外部機関（医療）とつながり、本人の「生きづらさ」の理解が深まる。そこから、学校でできること、保護者としての関わり方を振り返り、回復環境が整えられた。関係者の中で、本人の理解が深まるとで、本人も「わかってもらえる」感覚が増して、少しずつ「生きづらさ」が周囲に語れるようになった。さらにSSWの訪問にて、家庭でのさらに家庭での対話が促される。SCは学校の相談室にて保護者と面談、学校との情報共有を継続して、本人の困り事を家族、学校で共有することができ（また、夫婦間の課題も「対話」で浮き彫りになり）、家族・学校の対応全体のあり方が変化し始めた。

